

名古屋の蜻蛉研究小史

高崎 保郎

〒465-0026 名古屋市名東区藤森一丁目14

Short History of Studys on Dragonflies of Nagoya

Yasuo TAKASAKI

14, Fujimoriittiyome, Meito-ku, Nagoya, Aichi, 465-0026, Japan

要旨

本稿は本来別稿「名古屋の蜻蛉総括、昔と今」の一部を成すものであるが別途稿を起すこととした。幕末から遙か後年の戦前戦後、現在に至る名古屋における研究史概観である。

はじめに

幕末から明治にかけての本草学、博物学に関しては多数の刊行物がある。本稿は飽くまで略史であるので詳しくはそれらを紐解かれたい。

1. 殿様徳川慶勝の本草学

尾張藩14代藩主徳川慶勝（1824文政7年～1883明治16年）は、幕末維新の激動期に長州征討総督を始め政局の中枢にあり時代の波に翻弄される中であって、当時日本にもたらされた写真術にのめり込み多数のレンズを集め自ら薬品を調合して現像も行った。それと同時に本草学への関心も高く、名古屋で目にした野鳥25種の名称と数を日毎に記録したフィールドノート「小禽帳」も残している。さらに「群蟲真景図」と「群芳帖」の二つの画帖もある。前者は昆虫の写生図と昆虫、植物の標本をパラフィン紙様の紙に挟み色模様のある紙で縁取りし綴帳に貼り込んだものである。刊行物に掲載された写真で見ると標本は圧平され状態は良くないが、頭部を欠いたハラビロトンボ雄、サナエトンボの一種、シオヤトンボと思われる種、キチョウ、メスグロヒョウモン雄、サトキマダラヒカゲなどである。標本の一つコシアキトンボを蓬左文庫で実見した。この2画帖はサクラの押花に池上本門寺申三月十五日採（1860万延元年）とあるところから、井伊直弼から隠居謹慎を命じられた江戸の戸

山屋敷にあった頃の作成と考えるのが一応の目安であろうと徳川美術館の吉川美穂学芸員は推測している。当時名古屋城所在の台地の北方は沼沢地でトンボの絶好の棲息地であったことからすると、名古屋でも観察或は採集を行ったであろうことはおおいに考えられるところである。これら慶勝作成資料は徳川林政史研究所に所蔵されている。

2. 尾張藩士内藤東浦とハッチョウトンボの初記録

19世紀初頭に名古屋で勃興した水谷豊文率いる尾張博物学に先立ち、尾張藩士で画家でもあった内藤東浦（1728～1788）が著した各地の物産、風俗を地域毎に詳細に記録した「張州雑志」に既に矢田村の産として、その内容からハッチョウトンボと信ぜられる種が記されている。東浦の死後最終的にまとめられた本書は作成直後藩主に献上され秘蔵されたため明治時代に至る迄後世の本草学者の目に触れることはなかったと推測されている。

以上はこの事実を初めて「なごやの生物多様性」3（2016）で明らかにされた金城学院大学名誉教授小野知洋氏の業績に基づくものである。ハッチョウトンボは従来知られていたよりも数十年遡る18世紀中期から後期にかけて記録されていたことになる。

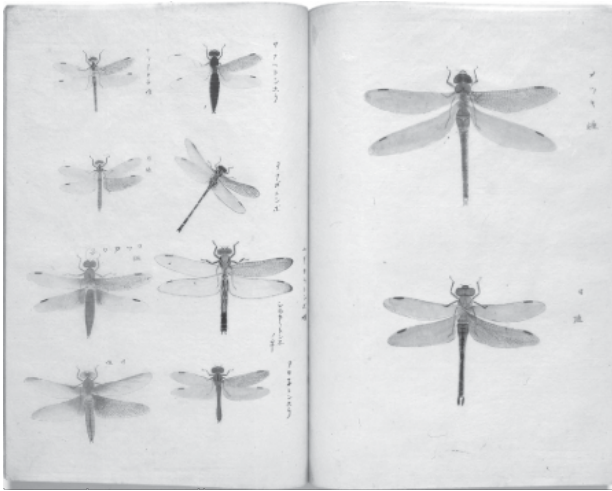


図1. 「吉田翁蟲譜」吉田高憲著, 小塩五郎模写, ギンヤンマ・ハラビロトンボなど (名古屋市博物館所蔵)

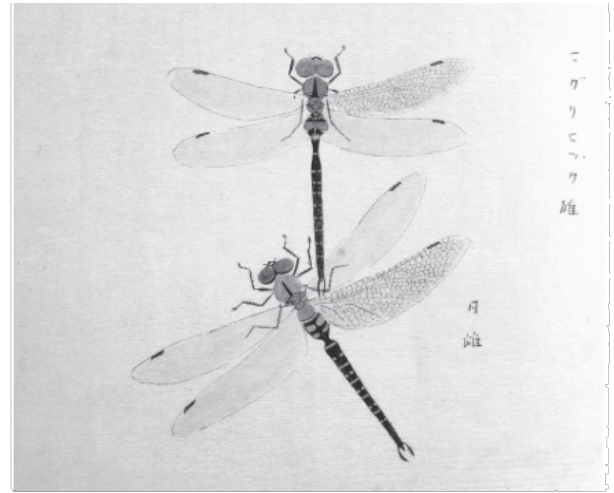


図2. 図1に同じ, カトリヤンマ♂♀図を拡大 (名古屋市博物館所蔵)

3. 尾張藩士大河内存真, 同吉田高憲とハッチョウトンボ

水谷豊文 (1779~1833) を盟主に, その門下生により名古屋で結成された博物学同好会 菅百社 (一説に1828文政11年設立と言う) の社員大河内存真 (1796~1883) (伊藤圭介 (1803~1901) の兄) は, 昆虫の写生図集 (日本には現存しないと言う) とその説明書中にハッチョウトンボが矢田鉄砲場八丁目のみに発見されると記述している. その後同社員吉田高憲 (平九郎, 雀巢庵, 1805~1859) は, 精細な彩色「蟲譜」を著した. これには名古屋附近の65頭のトンボが図示され, その中でハッチョウトンボについて, 「矢田河原の八町場に出る故に名あり」としている. 原本の所在ははっきりしないところがあるが, 同社員尾張藩士小塩五郎 (1830~1894) の手になる彩色写本が存在し, 名古屋市博物館にも所蔵されている (図1, 2). 後年名古屋虫乃会の土井久作により小塩写本のモノクロ版が刊行され, 松井はこれにより65頭の図を47種と判定し現今の名古屋のトンボ相と比較考察している (1951).

ハッチョウトンボの産地をいずれの記述も矢田としているが, この場所は現在の名古屋市東区矢田及び大幸辺りの矢田川左岸である (図3).

別に種名由来の場所は尾張国八町畷の水田とする説もあり, ここは現在の瑞穂区南端の松田橋通りとされているが文献的根拠は何も無い. 同地を校区に持つ市立穂波小学校の校誌写真用にと依頼され, 標本を提供したことがある.



図3. 宮前橋から左東区大幸公園方面, 右端矢田川, 2017.7.6

4. 愛知医学校の奈良坂源一郎による蟲魚図譜

奈良坂源一郎 (1854~1934) は東大医学部卒後の1881年県立愛知医学校 (現名古屋大学医学部) 開設と同時に解剖学の一等教諭として赴任した. 多趣味で博物学もその一つ. 1886明治19年に菅百社の跡継ぎとも言えるべき博物学の研究会を起し, 後浪越博物会, さらに後年愛知教育博物会と改称された. 奈良坂は5冊の博物図譜を著し, 内3冊分が「奈良坂源一郎蟲魚圖譜」として名古屋大学医学部第一外科同心会から刊行され, 名古屋附近のトンボ図35点を含む. 近代博物学視点による精緻な写実画であるが, 幼少時に学んだ狩野派の絵画素養によって描写された本草学的風情も併せ持つとされる. 後名古屋大学博物館報 (22) (鈴木・川島, 2006) で, ベッコウトンボ, タベサナエ, ニホンカワトンボを含む21種と同定された (図4, 5)



図4. 「奈良原源一郎蟲魚図譜」ヤブヤンマ♀
(名古屋大学博物館所蔵)

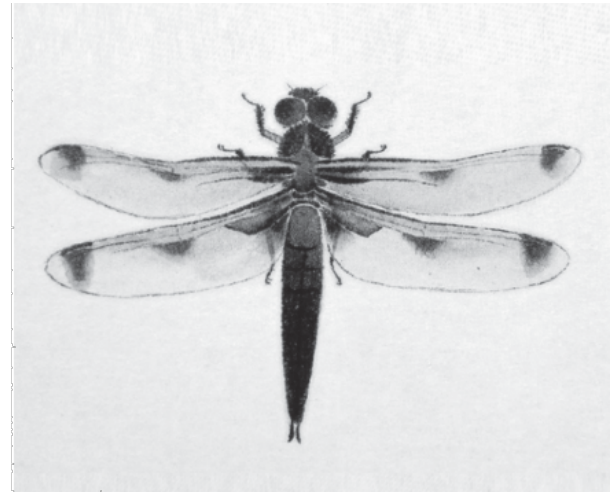


図5. 図4に同じ、ベッコウトンボ図を拡大
(名古屋大学博物館所蔵)

5. 昭和一戦前～戦中

大正、昭和初期における名古屋のトンボ研究の状況はよく判らない。生物全般の会としては、名古屋医科大学（現名大医学部）に本拠を置く会員100名程の名古屋生物学会が会誌「名古屋生物学会記録」を発行していた。この会誌9巻1号（1943）に山口秀吉が載せた「日本中部産蜻蛉目幼虫の分類」は、トンボ科とエゾトンボ科だけであったが、戦時でその後が続かなかった。この報文は非常に正確な図と記述で、戦後ガリバン刷り今にも破れそうなザラ紙数枚のコピーが出され、初期のトンボ幼虫研究に大変重宝した。1938年に名古屋虫乃会会誌発行者土井久作が同誌に雀巢庵蜻蛉譜を復刻したことは3.で述べた通りである。

戦前の昆虫関係誌で、名古屋に係るトンボ分布文献として戦後引用されたのは次の1件を知るのみである。

高木茂（昆虫世界、1936）の「名古屋市瑞穂附近の蜻蛉」とその補遺（同）で、当時は清流であった山崎川にゲンバイトンボを普通に産したとしている。〔注：昆虫世界は（財）名和昆虫研究所が1897年から1946年迄発行した機関誌〕

山本悠紀夫は戦況逼迫した昭和19～20年でさえも市内で採集し続けたことは驚きである。

6. 昭和一戦後～現在

名古屋の近代的トンボ研究の先駆者は、松井一郎（1921～1987）と山本悠紀夫（1927～2010）である。両

氏は大東亜戦争（1941～1945）直前から戦中にかけてもトンボに接していたが、やはり本格的活動の時期は戦後になってからである。松井は名古屋を基産地とするキロヤマトンボ（記載時はダイモジコヤマトンボ）と、山本と共に同ナゴヤサナエの発見者である。又両氏はオグマサナエ幼虫を最初に確認した。山本は複雑なカワトンボ種研究の先鞭をつけ、またシコクトゲオトンボ（記載時ヒラオトゲオトンボ）を記載した。絵画、図の技術は群を抜くもので、どちらかと言うと孤高の人であった。一方松井は洒脱な文章をよくし、随想やトンボ啓蒙書、日本のトンボ分布図（後の大図鑑などのもと）、文献集等何冊かを自刊した。同氏は大変鷹揚な世話好きで、戦後第1群たる安藤尚、高崎保郎、相田正人、第2群の鶴殿清文、清水典之は特に世話になった。続く成田茂、大野徹その後年に吉田雅澄、八木孝彦も加わった。松井は早くから会を組織し、三重県の石田昇三と共に東海地方蜻蛉研究の興隆を図り、その功績は今に続いている。

名古屋市健康福祉局生活衛生センターは、防疫・広報活動の傍ら、市内の蝶相、蜻蛉相を調査し標本を集収、年報で市内各区の分布状況を報告しパンフレットも2回発行している（図6）。トンボは1986年度から1998年度の間57種を記録した。衛生昆虫標本と共にこれらの標本は2017年現在同センターに今も保管されていることを確認した。守山区のオオルリボシヤンマも有る。

昭和40年代各自治体で新設された環境関係部局は、当初全て衛生部局の薬剤師、獣医師で人員を賄った。言

わば両部局は親子・兄弟の間柄である。若し、この標本が衛生部局で全うされない雲行きとなった場合は、多様性センター関与も選択枝の一つと史料する。

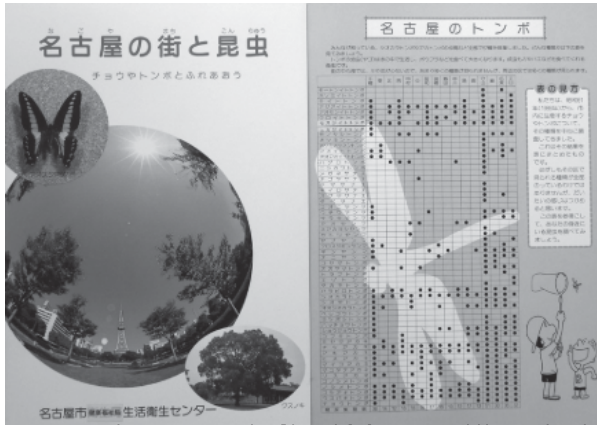


図6. 市生活衛生センター発行パンフレット第2版

7. 研究小史に関する文献

- (1) 穂積俊文. 1990. 研究史6東海地方昆虫学史. 東海の自然史, pp.387-388. 財団法人東海財団, 名古屋.
- (2) 石田昇三. 1974. 東海蜻蛉史その一研究の歩み<黎明編>. 佳香蝶, 26(98): 16-23.
- (3) 門脇誠二編. 2011. 奈良坂源一郎「蟲魚圖譜」: 解剖学創始者のミュージアム展示解説. 名古屋大学博物館, 名古屋. 11pp.
- (4) 小西正泰. 1996. 仰天! 尾張のフェアブル吉田雀巢庵. N agoya 発(37), pp4-9. 名古屋市, 名古屋.
- (5) 科学朝日編. 1991. 殿様博物学の系譜. 木下秀男, 東京. 292pp.
- (6) 松井一郎. 1951. 吉田雀巢庵の「蜻蛉譜」と名古屋附近のトンボ相. 新昆虫, 4(1): 28-29.
- (7) 永幡嘉之. 2009. 本草学から博物学へ~奈良坂図譜のギフチョウ~. 月刊むし, (458): 12-15.
- (8) 名古屋大学博物館編. 2005. 奈良坂源一郎著, 蟲魚図譜. 名古屋大学医学部第一外科同心会, 名古屋. 94pp.
- (9) 名古屋市博物館編. 2001. 特別展没後100年記念伊藤圭介と尾張本草学図録. 名古屋市博物館, 名古屋. 91pp.
- (10) N H K プラネット中部編. 2010. 写真家大名・徳川慶勝の幕末維新尾張藩主の知られざる決断. 日本放送協会, 東京. 126pp.
- (11) 小野知洋. 2016. 『張州雑誌』に登場するハッチョウトンボと思われる記述. なごやの生物多様性, 3: 11-15.
- (12) 鈴木邦雄・川島逸郎. 2006. 『奈良坂源一郎 蟲魚圖譜』に描かれた昆虫類. 名古屋大学博物館報告, 22: 211-247.
- (13) 徳川美術館・蓬左文庫. 2017. 江戸の生きもの図鑑ー見つめる科学の目ー. 徳川美術館・蓬左文庫, 名古屋. 6pp.

謝辞

文献について御配意を戴いた名古屋大学名誉教授 高橋昭氏と文献所蔵図書等の引用許可についてお手を煩わしたなごや生物多様性センターの職員の皆さんに深甚の謝意を表する次第である。